

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

命を感じる／伊丹ひまわり保育園（兵庫県）

子どもたちのロッカーや引き出し、靴箱から、その子どもの“大事なモノ”を見付けることができます。「“大事なモノ”を本当に大切にする子どもになって欲しい」「生き物の命や生きていることを子どもなりに分かって欲しい」と願い、考えたことはありませんか。今回は、このように保育者が願いをもち、子どもに寄り添って保育を工夫することにより、子どもたちが変容していった実践をご紹介します。



○ダンゴムシ大好き／4歳児

子どもたちは4歳組になった当初より、ハエ、クモ、ダンゴムシ、アリなど、見付けると「○○おった。あっち行ったで」と大騒ぎになったり、地面に顔が付きそうなほど必死に覗き込んだりする姿があった。特に、ダンゴムシへの関心が高まり、公園に散歩に行く度に夢中になって探す姿がある。みんな全身を使って遊具で遊ぶことを楽しむだろうと予想して、普段行く公園にはないような遊具がある公園に行った時でも、虫探しを楽しむ子どもたち。ダンゴムシの居場所を探り当てることができるようになってきている子どもたちは、たくさん捕まえていた。そのため、保育者が「ダンゴムシがいったいどんな虫なのか」とさらに興味をもつように、子どもたちに絵本を楽しむ機会を設定すると、子どもたちはダンゴムシのお父さん（雄）お母さん（雌）の違いや見分け方に好奇心が揺さぶられたようだった。

✦ 変容1 ダンゴムシの家を作ろう

5月中旬、散歩に出かけた公園で、ダンゴムシ探しを楽しみ、見付けて捕まえていた。いつもは捕まえたダンゴムシを握っていた子どもが、Rちゃん「いいこと考えた」Yちゃん「なにになに？」Rちゃん「ダンゴムシの家、作ってあげようや」Yちゃん「それいいなあ。作ろう」と友達同士で話し、2人でダンゴムシの家を作り始めた。それを見ていたSちゃんが寄ってきて、「私もする」と仲間に入り、3人で試行錯誤しながら、家を作り始めた。



まず、木の細い枝を地面に4本ほど差し込んだ。

次にたくさん落ち葉を集めてきて上にかけて「できた！」と言っていた。



ダンゴムシの家が完成すると、早速、ダンゴムシを捕まえていた友達に「ここに（ダンゴムシを）入れていいよ」と声をかけていた。誘われた友達もそこにダンゴムシを放して一緒に見つめていた。

保育園に戻る時間になったので、この日は作った家やダンゴムシをそのままにして帰ることにした。

● 保育者の読み取り

ダンゴムシの生息場所を理解する中で、これぐらいが丁度よいと子どもたちは思ったのだろう。ダンゴムシが落ち葉の中によく潜んでいることを体験として知っていると思われるような作りに、少し驚いた。

✦ ダンゴムシを飼う！！ そのきっかけ作り

● 宝物入れ

子どもたちの靴箱には、「宝物入れ」と称して、牛乳パックを半分に切った入れ物が置いてある。この箱には、きれいに作った泥団子や、キラキラ光る石など、子どもが大切にしておきたい物を入れる。保育者はその宝物入れの中に子どもが見つけたダンゴムシを大事そうに入れていたのを発見した。

保育者は、宝物入れに入れておくことはダンゴムシにとっていい環境ではないと思い、また、公園でダンゴムシの家を作る姿を活かしたいと考え、子どもたちに「クラスでダンゴムシを飼ってみる？」と問いかけた。子どもたちは待ってました！と言わんばかりの勢いで「飼う」と言い、ダンゴムシの飼育をすることになった。

ダンゴムシを飼育するには何が必要か自分たちで考えた。いつもダンゴムシ探しをしていた子どもたちは、「砂の上にいっぱいたよな」「枯葉の所でも見付けたで」「大きい石の下に隠れていた！」などと、ダンゴムシがいた場所の状況を思い出して話した。ダンゴムシを飼育するために、子どもたちが記憶を頼りに用意したものは、「砂・枯れ葉・石」の3アイテムで、「砂は近くの公園で集めたもの、枯れ葉はエサとして、石は隠れられるように」と、自分たちで考えながら飼育ケースに入れて準備した。準備したケースの中に、捕まえたダンゴムシを入れて、ダンゴムシの飼育がスタートした。



✦ ダンゴムシを飼う！！ でも飼い方を知らない…触りたい

ダンゴムシの飼育をするとは言ったものの、飼育方法を知らずに始めたため、子どもたちは、飼育ケースからダンゴムシを取り出して眺めたり、遊んだりしているので、育てるといふより、ケースに入れて楽しんで見ているという感じであった。そうこうしているうちに、ダンゴムシは次々と死んでしまった。ダンゴムシが死んでしまったことを、子どもたちは悲しむこともなく、当たり前のように受け入れていた。とうとう飼育ケースの最後のダンゴムシが死んでしまった時、Aちゃんが「土に埋めてあげよう」と言い、死んでしまったダンゴムシを埋めた。

● 保育者の読み取り

雄と雌のダンゴムシに興味をもった子どもたちが、今は飼育に興味をもち始めた。しかし、生き物を育てる経験が少ない子どもたちにとって、「育てる」とはどういうことかあまりイメージがもてないようだ。

● 保育者の援助

絵本から興味を深めていこうと思い、『ぼく、だんごむし』の絵本を保育室の棚に立てかけておく。



[ぼく、だんごむし](#)
作：得田之久
絵：たかはしきよし
[福音館書店](#)

✦ 変容2 ダンゴムシのお家を作り、霧吹をして世話をしよう

子どもたちは、早速本を見付け、「先生、この本読んで！」と持ってきた。大好きなダンゴムシの絵本なので、最初から話を聞く姿も真剣で、読み進めていくと子どもたちのすでに知っている情報が絵本の中に書いてあった。子どもたちは、知っているページについては、納得しながら聞いているようだったが、最後のページに、ダンゴムシの飼い方の話が出てきた時、子どもたちの聞いている様子が変わった。そして、本にあったように飼育することに再挑戦をするため、ダンゴ

ムシを飼う準備をした。また、「霧吹きで、時々水をかけてあげないといけない、と書いてあったよ」と話題になり、順番に霧吹きをすることになり、「当番」が決まった。当番が霧吹きで水をかけ始めると、それからは、子ども同士で「今日、シューした?」と尋ねるなど、今まで以上にダンゴムシを気にかけるようになった。



✦ 変容3 ダンゴムシの赤ちゃん、どうやったら生まれるかな?

5歳児クラスで飼っているダンゴムシに赤ちゃんが生まれたという知らせを聞いたので、見せてもらう。「ダンゴムシ母さんのお腹には卵がいっぱい」「うわぁーちいちゃい」「ダンゴムシ母さんと同じ形している」と、口々に見たままの感想を言っていた。この写真を見て、ダンゴムシの赤ちゃんを探したり、「どうやったら、赤ちゃんダンゴムシが生まれるのかな?」「絵本の通りに土や葉っぱや石を入れているのに」と、いろいろと考えている様子が見られた。また、その後もダンゴムシの飼育は続き、5歳児クラスの飼育を見せてもらい、「ニンジンやキャベツがあった」「ダンゴムシって、野菜も食べるんや!」と、野菜をあげていることを知り、絵本に書いていた枯葉やコンクリート以外にもいろいろ食べることを知った。自分たちとの違いに気付いて話題になった。

● 保育者の援助

赤ちゃんダンゴムシを見られなかった子どもたちのために、写真を撮りクラスに貼った。



✦ 育ちを読み取る

虫に興味のある子どもたちは、1回目のダンゴムシの飼育の失敗を経て、2回目は自分たちなりに、いろんなことを考え、実践していく姿になった。最初はダンゴムシにあまり関心がなかった子どもも、クラスで飼育すると興味が出てきて、触ることもできるようになった。また、自分たちで調べることや、やってみた経験は自信へと繋がり、子どもたちは学んだことをとても得意気に、保育者やそれを知らない友達に話すことができていた。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム 幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」